

日に日に暖かさが増してきました。桜の開花も気になります。
現在会員登録数 4,381 人さま。次号は 4 月 22 日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

【1】お知らせ

● 「第 157 回日本児童文学学会 関西例会」

ラウンドテーブル「15 年戦争期東アジア児童文学の諸相－香港、広東・台湾、
沖縄の事例から」（講師：齋木喜美子（関西学院大学）、成實朋子（大阪教育大
学）、浅野法子（大阪成蹊短期大学）） 他、研究発表

日 時：3 月 23 日（日）13：00～16：30

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 定 員：60 人 参加費：無料

主 催：日本児童文学学会 関西例会 （IICLO 共催）

詳細・お申し込みは→ Peatix <https://jkansaireikail57.peatix.com/>

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の
皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会な
ど、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube 版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram 随時更新 https://www.instagram.com/iiclo_official/

● X（旧 Twitter）毎日更新 https://twitter.com/IICLO_News

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『少年が見た戦争』 宮川健郎/編 戦争がわたしたちを見つめている 戦争
文学セレクション 汐文社 2025 年 1 月 対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

概要「少年・少女」が見た戦争を描いた8編のアンソロジー。「夜」（三木卓）は、日本の植民地であった「満洲国」に暮らす少年が日本に原子爆弾が落とされたことを新聞社で働く父から聞き、ソ連軍が町に近づく緊迫感を体験する。詩「わたしが一番きれいだったとき」（茨木のり子）、看護婦だった母が息子たちに病院での空襲体験を語る「春さきのひょう」（杉みき子）、「そして、トンキーもしんだ」（たなべまもる）、疎開の子どもたちを描いた「大もりいっちょう」（長崎源之助）、兄弟で屁の試合（ヘリンピック）をする「ブツとなる閣へひり大臣」（古田足日）、「烏の北斗七星」（宮沢賢治）、40歳になった「私」が空襲について回想する「赤牛」（古井由吉）が入っている。

Y：宮川さんが編集された「戦争がわたしたちを見つめている 戦争文学セレクション」全3巻が出版されています（2025年3月現在2巻『こわされたまち』まで、まもなく3巻『戦火のあとで』刊行）。この本はどういう意図で出版されましたか。

T：この仕事は、汐文社の30代の編集者である新嶋遼さんからの依頼で始まりました。作品選びから二人で行いました。

日本では戦後80年になりますが、世界を見ると、内戦を含め、ずっと何らかの形で戦争が続いています。そして、今もウクライナやガザが戦場になっています。そんな中で、「反戦」や「平和」を最初にいうのではなく、今の10代の子どもたちに戦争を含む歴史と、戦争の中を生きてきた人がいるということを知ってもらいたいと思って作りました。それが、おとなになるということではないかと考えたんです。実は、新嶋さんと相談した最初のシリーズ名は「戦争文学がわたしをおとなにした」でした。

Y：実際のシリーズ名は「戦争がわたしたちを見つめている」です。

T：先ほどのタイトルは汐文社社内で、子どもたちが受け取る際に少しわかりにくいということになり、「戦争がわたしたちを見つめている」というシリーズ名が提案されました。まるでわたしたちを見つめているかのように戦争が突きつけてくる現実に、読者が目を向けてほしいという意図です。

Y：第1巻は『少年が見た戦争』です。

T：この「少年」は、「岩波少年文庫」の「少年」と同じで、性別に関係ない10代の子どもを指しています。

Y：冒頭の作品が三木卓「夜」。日本は原爆や空襲を経験した被害者であるだけでなく、加害者です。満洲という傀儡国家を舞台にした作品から始めることでそのことが意識づけられていると思いました。

T：最後の場面、夜明けに、主人公の少年と兄が見つめ合います。そして「今、自分たちがこの世界の歯車の回転に従って生きる、直接の場に立たされていることを直感した。」と結ばれます。このシリーズを読む読者に、この感覚を共有してほしいと願いました。

Y：大人の小説もかなり入っています。

T：読者対象は10代。小学校高学年でも読める作品も、中高校生にぜひ読んでもらいたい大人の小説ものせました。総ルビで、脚注も付けました。同時に、小学校低中学年向けと言われる作品であっても、中高校生が読むことで新たな気づきがあるという作品も入れています。

Y：たとえば、たなべまもる「そして、トンキーもしんだ」ですよね。戦時下の猛獣虐殺のことは、『かわいそうなぞう』（土家由岐雄）でよく知られていますが、事実と異なるという批判があります。そんな中で、事実に近い作品がこのアンソロジーの中に入れられた意義は大きいと思いました。

T：1冊の中に、詩が1編ずつあると同時に、教科書に掲載されたような有名な作品も、この作家にこんな作品もあったのかという作品も入っていま

す。

Y：戦争をさまざまな角度から考えられるシリーズだと思いました。いくつか寓話的な作品やSF的な作品があることで、「戦争とは何か」という問いが投げかけられている点も興味深いです。そして、アンソロジー全体から「生きる」というテーマが読み取れる点も納得しました。また、今日マチ子の表紙の絵から「作品を通していっしょに考えよう」と誘われているようにも感じました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第115回「[手紙(一)]」

作者からの「手紙」

昔、く力が非常に強く、かたちも大層恐ろしく、それにはげしい毒をもつ一匹の竜がいました。弱いものは竜を見ただけで気を失って倒れ、強いものでも竜の毒気にあたれば死んでしまうほどでした。しかしある日、竜はくよいこころを起こして、これからはもう悪いことをしない、すべてのものをなやまさない」と誓います。

静かなところを求め、林の中で眠っていると、獵師がやってきて美しい竜の皮を剥ぎはじめます。竜は目を覚ましましたが、先の誓いから、だまって獵師に皮を剥ぎ取らせませす。竜はく皮をはがれながらくやしいところさえ起こさず、くいまは皮のない赤い肉ばかりで地によこたわりませす。

苦しきのあまり竜は悶えませすが、そこに竜のからだを食べようと多くの小さな虫があらわれませす。くいまこのからだをたくさんの虫にやるのはまことの道のためだ。いま肉をこの虫らにくれて置けばやがてはまことの道をもこの虫らに教えることができる」と考え、からだを虫に食べさせた竜は、とうとう乾いて死んでしまひませす。その後、竜は天上に生まれ変わひ、お釈迦さまとなつてみんなに一番のしあわせを与えたというお話です。

釈迦の前世を描くジャータカ（本生譚）の一つで、一千字程度の短い物語です。他の命のため、自身のからだを捧げるシーンは、「二十六夜」「グスコブドリの伝記」「銀河鉄道の夜」など、賢治童話に多くあらわれませすが、本作はこうした捨身の精神を直截的に描く佛教色の強いものといひませす。

あらゆる苦しきに堪えしのび、それを自ら受け入れ、心頭滅却すれば、たとえ肉体は朽ち果てようともその魂は転生し、まことのみんなの幸いのために生き続けるということが描かれていひように思ひませす。敢えてくおとぎばなし」ではないと結んでいひるところにも、作者の本気度がうかがひませす。

「[手紙]」は(一)から(四)の四種類の文書からなり、本作はその第一篇にあたひませす。もとは、賢治が布教のために作成・配布したものでせすが、く印刷物ではあるが、発表機関（メディア）を介在させない「配布物」、しかし、匿名で（栗原敦「本文について」『宮沢賢治コレクション2』2017年）という、他の作品とは異なる独自の特性を持つものでした。この四種が長いあいだ「[手紙]」と呼びならわされてきた理由は、「[手紙]（四）」で示されることになひませす。（ペ吉）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション2 注文の多い料理店』によりませす。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 69

「だから トラゴロウは のんきだっていうんだよ。じゃあ きくけど、ゆうべ どこへいったか おぼえているかい？」
「うん、ゆうべは たべものをさがしに のはらのうほうへ いったよ」
「そのとき、くりの木のそばを とおったろ？」
「うん、くりの木の下で すこし やすんでいったんだ」
「ほら ごらん。そのとき、くりの木の下で ちょっぴり ねていこうかな あなんて おもってさ、目をつぶっているうちに ぐうぐう いびきをかきはじめてさ、それっきり いままで ねむりつづけているんじゃないか」
「でもさ、そうだとしたら どうして ぼくは いま ここにいるんだろ」

(『目をさませトラゴロウ』 小沢正/作 井上洋介/画 理論社 2000年6月 p.143 *初版1965年8月)

山のたけやぶに住むトラ、「トラノ・トラゴロウ」が、ある朝、目を覚ますと、となり山の「とらのすけ」からの誕生日プレゼントとして肉まんじゅうが届いていました。肉まんじゅうを食べようとする、カラスにお皿とローソクが必要だと言われ、猟師の家に借りに行き、目を閉じて肉まんじゅうを食べようとしたとたん、お皿の上に肉まんじゅうがないことに気づきます。

そこで、カラスに聞きますが、カラスは肉まんじゅうを食べていないと言います。次に出会ったリスの言葉で、トラゴロウは自分が「とらのすけ」のことを知らないことに気づきます。そしてウサギに「あんたはほんとうは森のはずれの くりの木の下で、ぐうぐう ねむっているんじゃないか」と言われ、引用に続きます。

ここで、トラゴロウは、眠っているトラが自分なのか、ウサギと話しているトラが自分なのかわからなくなって不安になります。この存在の不安こそがトラゴロウの魅力です。そして、同じように不安になるエピソードは、この本に収録されている、箱に入ってトラゴロウが2頭になる「一つが 二つ」や、きばをなくしておかあさんに自分だとわかってもらえない「きばを なくすと」などの作品とも共通しています。

トラゴロウは、自分の誕生日がいつかも、自分が肉まんじゅうを食べたかどうかについてもわからなくなります。けれど、トラゴロウは自分の疑問に答えるために謎を解き、この事件が人間の仕業であることを突き止めます。いつも腹ペコで、ときどきわけがわからなくなるけれど、最後は疑問を解決し、自分の存在を確認して満足する「トラゴロウ」のたくましさは、今の子どもたちにも魅力を感じるのではないかと思って再読しました。(Y)

《4》 行って来ました！

芦屋市立美術博物館で6月15日まで開催されている「隙あらば猫 町田尚子 絵本原画展」に行ってきました。町田尚子による絵本原画、本の装画、タブロー、制作資料など、250点以上が、吹き抜けのある2階建ての建物の中にゆったりと展示されています。町田尚子は、1968年東京生まれで、2007年に『小さな犬』(白泉社)で絵本作家としてデビュー。『ネコヅメのよる』(WAVE出版 2016年5月、岩崎書店 2021年11月)が大ヒットし、猫を描く絵本作家というイメージが広がります。

入り口を入ると、「Welcome cats!」の展示。さまざまな猫の絵本の原画や芦屋市立美術博物館のために描かれた猫の絵などが並んでいます。『ネコヅメのよる』のおおぜいの猫が月を見上げる絵のパネルもあって、写真コーナーになっていました。そこから2階に上がると、「装画・挿絵の仕事」、「町田尚子の部屋」、「ねこたくさんの部屋」、「風景の部屋」、「おぼけの部屋」、「町田尚子のプライベートワーク」、「図録兼書籍掲載の新作 白木のピョン」、「空想の部屋」、「初期の絵本/単行本/雑誌掲載」に分けて展示されていました。

町田尚子の絵本全17冊の原画をたっぴりと楽しむことができたことで、町田作品の魅力を感じることができました。タイトルに「隙あらば猫」とあるように、猫の絵が多く展示されており、猫好きと思われる来場者たちはうっとりしていました。

ネコヅメ＝三日月を見るために猫たちが集まってくるという『ネコヅメのよる』は、「2009年から一緒に暮らしたはじめた白木という猫」がいたことと、「原発被災地に取り残された犬猫の給餌ボランティアをしている友人がいて、活動に同行させてもらったことがありました。その時、細い三日月を指して友人が言った「猫の爪みたい!」という言葉が”ネコヅメ”のもとになっています。給餌活動中に会った猫たちも絵本の中にたくさん登場してもらっています。」(『町田尚子画集 隙あらば猫』 青幻舎 2022年8月)という二つのエピソードが背景にあるとのことで、どの猫の表情も多くのことを物語っているように見えました。

猫が描かれていない絵も心に残りました。特に『うらしまたろう』(山下明生/文 あかね書房 2010年5月)のサンゴの絵のピンクと紫で透き通るような海を表現した色使いや、『いるのいないの』(京極夏彦/作 東雅夫/編 怪談えほん 岩崎書店 2012年2月)で、少年が和室に座って天井を見上げるアングル、『あずきとぎ』(京極夏彦/作 東雅夫/編 京極夏彦の妖怪えほん 岩崎書店 2015年3月)の、空が大きく、緑あふれる中で少年が犬とともに森の中に入っていき美しくかつ、ちょっと不安に感じられる構図などは、原画を見ることができてよかったと思いました。(K)

芦屋市立美術博物館 <https://ashiya-museum.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第18回

第5章 古田足日先生

その2 「散文性のかく得」(中の後半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年でした。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介
■ ----- ■

●講演会「子どもの学びとコミュニケーション」

講師：山極 壽一（総合地球環境学研究所 所長、人類学者）

日時：4月5日（土） 16：00～17：30 ※有料、要申し込み

会場：サニーストンホテル（吹田市）およびオンライン

主催：クレヨンハウス大阪店

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『少年が見た戦争』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は4月10日（木）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
近鉄奈良駅の南に広がる「ならまち」界隈のウォーキングに参加しました。伝統的な街並みが残り、古い木造住宅をいかしたコーヒーショップや雑貨屋、飲食店などがそこかしこに。24代続く薬屋や、創業120余年の蒲鉾専門店もあり、つかの間のタイムトラベルを楽しみつつ、現代と調和している点にも魅力を感じました。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
